俳諧百一集

越中康工選

へ5
1617

1617

俳諧百一集序

越中康工選

東京帝国大学図書館蔵

歌の百人一首なり遠国の連歌仙なりとまみかるゝ
ものなりとて此道の独心ゆゝしく〳〵と慕ひ今まで
はまを言ひ感乃なりのみなりその人々と画さ紀夕
師と仰ぎ友と尊ぶ〳〵ほ〳〵くまを〳〵を追ひ
俳友をもかゝる板木のせゝ〳〵の高きを永正
頃の守武なりを文の宗鑑寛永の貞徳貞室等の
立国を頼季吟寛文の宗因かく世〳〵の先達有と

以て其體一変を出ル事なし
眼前万象のまゝを不易乃さゝ〳〵みとゝゝ流行之中
に有て数百乃齢を閲し〳〵て詠境と踏て天下幾ント
芭蕉風を皈 杜子西行と雖ども〳〵古今乃名師
の門人を去来有て実情を尽し〳〵其角夫草嵐雪
涼菟北枝各よく翁乃風格をうるを許六を欠ル
支考乃風雅乃血脈を汲〳〵隋句之頃乃一人を〳〵方諸
を命ずこゝを以て中頃乙由出て滑稽自立乃舌有て

杖を中興乃風流を再ビ今乃海内さんぬとゝ
なるをもちゝるこうけを以て物作りの皆造化乃神
を手とくてを為し〳〵且奇眼力乃ゆきゝる所世乃
鳴ル作者も秀逸を足て〳〵乃を少きを為
一句乃をくを去るを為て載之則百一集と為すゝ
や注を是〳〵けくをむと古人を以て百〳〵其句く
乃意乃ゆるを作を筆舌を用ひて説をうさ〳〵を
初学乃人乃をめを為と法書乃訣を以て弼り

志ゝ此ものこの一二を述るのみ

寶暦十四年甲申夏五月

八椿舍自序

伊賀國産
塚ハ江州石場
儀仲寺ニアリ

水乃音　芭蕉

志ゝ心

墮氣

古池や

此のる意味や有りん吟してなみだを流し
唱てさまし〳〵み自然と行る中にはまたも
杖歩し信まく〳〵仲へし

伊勢産長
宦荒木田醫
靈社末社ノ
内ニ入ル

元氣や
神代
乃
事も
思ふ
守武

此神職や古代すなりて
此道を好き星

山城國山崎
隱者飛行
スト云

ふる
山
乃
物
ふる
乃
元氣

宗鑑

今乃世をきく
世乃切をきく

伊勢ノ百人也

常小耳を目小〻〻
万物を考事心泰山乃
〻〻

望一

東長双九ゝ云
御傘ノ作者也

月や
東方
朔乃
新法師貞徳

名家乃手法

花捨新人
兼業雑種

京貞徳ノ高
第也一生書ク
物ヲ買集
焼捨シトナリ

見きくと
きゝうゝ

花乃山

貞室

妙境たのもしき人乃目も幸しむ
芳野之桜人乃数景哉つま
此一句小此山乃数景哉つま

京ノ人也
家業雑屋

一吹ふき
師走乃
ゆき

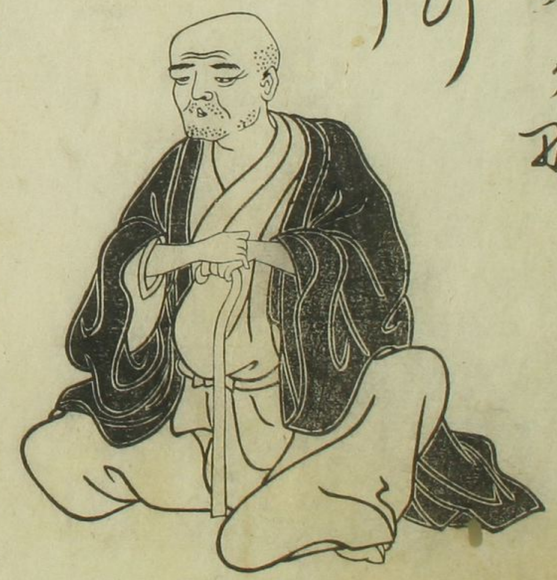
衣城

立圃

国月乃吹ふしくかしこく
ゑゝ世乃
調うをし

京ノ人也

百敷の
山の
桜
をる
順禮乃
重頼



第ちうくしる上
弥生只枝をる
枝乃こゝ山ゝ奥ひの

江戸連歌
花本也知行
千石祥ヌ江
戸ニ住ス

花見の和
季吟
ゆるくく
ゆくく
一儀と

詞強和とかうし
味ふうしゝ
意亦
をふしゝ

春の花　湖春

師走　山

冨士乃　雪

一句乃語梅ヲ四季乃風景を
おもふて詠能し

摂津国大坂
三十一風ノ眺
淵也

白雪や

芦の

別

句

宗因

為手乃物を落ち

江戸ノ板本玄哲
芭蕉ノ高弟
ナリ

稲妻や
さのふハ
東
ゆく
西

其角

秋乃秋乃かりうんと世乃さはと
安さふ　翌や又ハ
訳　ゆくも直ふ心乃ゆきと有人と
恨きる詞と強しも乃乃意味と含く
絶作し

義濃東花坊
ト別号アリ

夕ゝ形見龍

鳴田

声ふ

牛呵る

自然と眼乃前乃美景乃
妙なる　花　三重乃さとむしき所者
人ゝ　ゝ　勝を断　しむ

江戸芭蕉ノ
高弟ナリ

東山

嵐雪

蒲團

象りの深ふしを誅する度ごとに
平安の景を思ひ出ゆるし

京蕉門
高弟ナリ

應くとくや

其角

隨聞記ニ曰
支州支考曲翠正秀其角許六おの〳〵称嘆
ひまなく多ク略ス去来者曰情ゆたかにして自賛ス
曰此句ハ自我ノ寂乃ちくぬるとき一ときハ佳ノ句ハ
翁乃句ハ強キも弱キも得るも者ニ当ルもいつまでも此寂乃
除るとなくやむ所ノ寂ノ

去来

江州產也

取つゝ如

ちゝて

うゝ

蛙

の形

大艸

爰ハ小のもとゝゝ
此人乃悟道をゝくゝ嗚呼

伊勢神風
館遊人十り

風乃

一日

吹て

居り

丑

乃至

涼蒐

者乃ゝ小
ゝるゝゝ乃
形骨ゝゝ乃絶唱ゝ
ゝんゝ胡ゝつゝゝ

江州彦根産
伊井家二千五
百石領藩門
ノ与力ナリ

許六

加州金澤産
家業トギヤ
ナリ号加藤衛
ト云

夕月や何映
る
る
北枝

百尺乃竿頭つゝ
ひくる 砂子限

江戸ニテ大坂ニ住

祝しを重ね

野坡

絡めや

垣乃

山吹乃

なる色き恋と乃づけて

よく石昂

流りまるホ日本堂

江戸ニテ桃青

魔ノ友トス

月丹青

青葉

山郭公

乃鰹

素堂

鍾舎乃吟り 芭蕉翁 妙小て

三臣 切乃絶頂ニ

江戸ノ醫者
三宅蓮門ら
すすり

秋乃
尚白
木
細らうふしゝ物をおこそ
ふ
ね
実性をなまんまくし

江戸ノ三宅蓮
門ノら すすり

秋
是
竹乃
杉風

浅き砂川

大坂風アル
俳人ナリ

信德

雜談集ニ曰今年就中腸先斷
と白氏乃年と悲しきる意も
かなしく老乃年と悲しきる意も
よるしきちりけさきる頃と

京都ノ色

鬼貫

行くれく春日と真ホ
春乃乃 夜 夜風七ちしホ言外乃妙方
ちまちまハ 時節乃ちまちまを付ホ者と
春ちまちく

花洛人より

風乃
果を
看て
海乃音

言水

世にいふ
風乃言水と称す
則碑乃銘ハ殘す

[illegible]より

業茂つ
春を
ちりつ
まみちぬ

木因

[illegible]
[illegible]

加賀金澤ノ
町人ナリ

一笑

雨

春乃雪

かるる所乃ひまを待くらす
又所乃ひま他急ぐ

江戸ノナリ

大くら乃
月をくも
めて

七・十二

任口

なかくとハ月をも
めて〳〵ちまをそ乃 昔男乃金声小
仍くセナニち刈 此上人乃年なを〳〵
訪花を求ち〳〵て乃所なり

江州大津の人なり

唐木

つく
児乃
ちゝみ弘

千那

篇突小口ゝ付るゝ所小
手拍と称し付るゝちゝみ乃
情ゝ思ふて 翁も一箕一句と感ぜられ

江州大津より

那木節

老木
ゝ
ゝ
ゝ
ゝけ
ゝ
花咲き

百花乃中ゝ咲ゝ自然乃
寂を唱ゝ感ぜ

月花の紅　露川

海乃

色くさ

分別と

心も羽も及ぬ海原とてこそ月乃にゝひと作を
彼都良香ゝ
三千世界ハ眼ノ前ニ盡ヌと
詠るさもこそ

枯竹や

富ふ市

ちぢ

二　三　万子

安くと入ゝ意味不淡
海棠ゝ香ゝ金橘ハ酸ゝさ

秋之坊

為子爺を[illegible]

世俗常者用口小仰ら

尼智月

上人[illegible]

言語道斷乃[illegible]

麻かりの
踏とゝ
宵戸
の
月見の
浪化

卯無斎小似て樵民の
意有り工人乃為悲を称す〳〵

秋乃
ふる
こゑ
かな
行灯や

正秀

殺生乃法よゆみとちるる
秋風乃ちりまつ入ふ〳〵

うゝやゝし

おゝとし

切

時

猫乃京

越人

浪化君乃聞書ニ曰
芝家々乃
うゝやゝし世とも乃
のゝ猫乃とゝ乃ふゝ

坂本乃那

尼芳樹

秋乃

中川

焼く

第乃ち

俳門ハ古来乃ゝ乃京乃
皆白ゝ乃ゝ二章古ゝその形と仏乃
俳諧ハ

麦喰しく
厂とおもへ
とく
ゝの色
野水

隨聞記曰
なくてゝ人き意ゝ
是ハ仍ゝ

う玉ぬけ
蓑乃
を吉も
雨秋
ふる

曽良

雄食曰くさぬけいとゝ
出しゝ蟬乃ぬけ殼と
苔乃底乃秋乃ふる涙を流く
衣類ゝしゝりゝ乃久さを法ん
かくゝかきゝ

牛乃角
墨書
入
分
梅ゝ糸や
句空

梅乃はなゝ[illegible]
下ゝ[illegible]十月[illegible]

板乃雨
凡兆
ゝの
高積
下京や

浪化君乃関雪ゝ四上ゝを[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]を翁乃ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]

その

鼻紙の

是式部の思惜真董なるへし
手名とのこふし〳〵誰の是とおもはさん

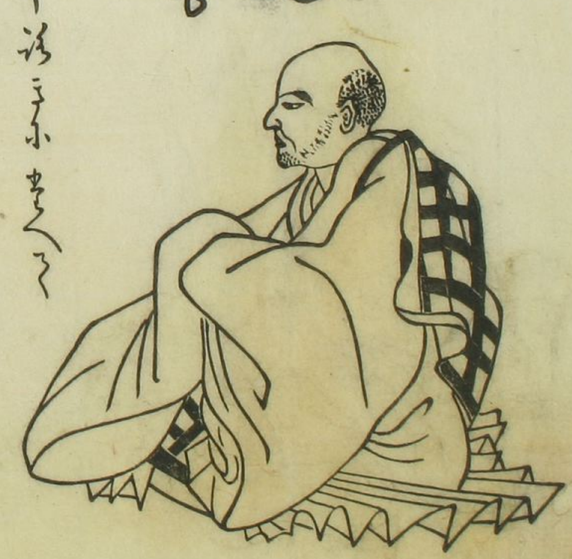
友吉

四角な

月も

天秤乃

月も四角なかけ星と云〳〵
くく光なきみくとゝいふこと和歌
一作よく田舞とゝる人とやいふん



李由

時雨乃
光遠
日枝神社

其景おもしろき事
心ゑんとふく
彩る竹林かな

木導

水乃音
川
中
青乃
嵐哉
や

宇陀法師小口師説小京曲者一乃句之
後代手本ゝゝ
風雪いまむ花乃糸口
とゝ脇しゝ送り
そひしゝ

菜

はく

ら

お

と

ら

二水

花ゝ咲ゝ時ゝ花ゝとおもふ花ゝさ
ゝ時ゝ散ゝ時ゝもまた逸ゝ
ひ屋ゝ乃ゝ故ゝ

男ゝ

一枝

藤ゝ

ゝ

ゝ

山

と

世ゝ中ゝ乃ゝ一枝藤ゝ
歌屋乃逸詠ゝ乃情
を

秋乃杭　和及

通り

大石乃

[illegible]の句は孤の[illegible]しさ各別の杭乃操乃古今[illegible]を[illegible]味多し

重軌

[illegible]

世上小

花菊

[illegible]さう淋しき出る

[illegible]

如意すて
教ゆる
身を
粟乃種やや

不易乃功をなすこと心をやる〳〵

孝子
傳兵衛
妻乃
秋乃
とめ

屋流小貞を實乃
此夫人乃心を知べし
玄隆描

枯と
ハと
思ふと
和

梅乃義

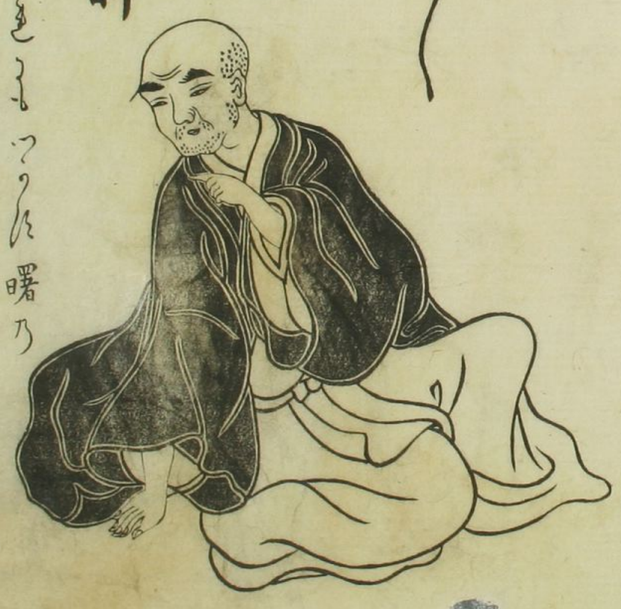
虚有り實有り寓奇く

從吾

夕暮も
曙も
鶏頭

義

巴静



秋乃夕乃雲もつるに曙乃
なるものの色かしと鶏頭乃ふつくら
なる深とそのもとホ述く嘉子そこ
なく乃清然を思ふ

雜三

炮烙を消ぬ
ちらと拝る
雷和尚乃一声
みゝ又さらし

鬼士

和尚の
ふるる
拝ても
初霜や

腸氷々と
霜も好情

物おもふ
人も
うしなふ
火燵かな

左静

もろもろの名画乃
細色をうつしたり

二日月釣の船

五竹

つるかな
麻乃声

此小艸へうもろこし
ろろ賦情石斜

涼しさ乃
ものの
哀や
神路
山

尼
素心

曉や
灰乃
中より
ふり
淡々

山路こゝの秋
石間の水
吟く
雑子

常も聚る山路乃つまき
声をそゝる清き
いよく閑寂ふかし

司鱸

悔くと
比叡乃
きゝもさだ
袷ゝ形

舍衆

母と始主子乃衣情と
別しく目睫連乃
昔もとさゝ

梶乃花

鶏乃声小

春波

素風

手負ふ
杜芙
おさ
とと
人も
破ちり

秋瓜
乃瓜
嘉
所も
細さ
青柳や

曲節自在

千代尼

珈涼尼

白雨乃形容新ら
奇也

星

蓋

麻父

切切よゝ不堪聞
都合〳〵きゝ法華乃星
ちもゝ乃仲を
ハ乃字乃佛ゝ言外乃
可ゝ乃ゝ格情高ゝ

何をゝ
声乃
剱や
秋の
雑ゝ

岸虎

自然と物淋しく心面

萩乃花
咲とゝ
日ゝ
乱ゝ
禹洗

萩乃匂ひおもてハ
ゆゑ二乃珠作とゝ

雪乃積の
面清ゝ
や
ゝ
次
生可

きゝけ者ゝ
目さまし

畑中の
芳野

柳の郎

左菊

麦林師乃評ヲ
万山乃花ハ
細工まつまとそ
感心不ル
白と宴会
実象とつつ

一ツ家乃
灯火
中乃
くまゝ
鳥酔

一點ノ漁燈杳霧ノ中
ちまちらす似つゝ風景
まむしゝ
まゝ味外

灯火を
つまもて
ほたるの
夜乃高
蓼太

霧まがふ
心を沈し
此秋乃月

人も
くくるる
見風
山乃
霧中
待宵や

秋の中ゝ生聖乃月とうひ
独霧の山深きもくくる下みゝ
よく飾真乃 滑稽乃おのしみ

涼代衣

ちくとハ雪乃霧を結ぶまく
百千乃声ゝ諸ふ事
働き感語淋乃比

晩九

くまぶら

庚代

竹四

蓑笠を

竹節乃新年成乃
ひ由をおもむ令せるゝ
味霧りゝ

百ちゑ
義もも
とちの
ゑ新や

也有

夕部紙衣乃を吉寺を
含く岩を弱き
作衣 清つ

秋人ち
を
ゆき
こうゑや
ゆゑ
封ト

物語ふと乃古葉をとりしく
大象 髪筆をむけるうゑ

其汀

文琴

初

柳几

大阜

拍子乃
落葉
とゝや
玉乃河

門瑟

哥仙ハ人ヲ遍昭と
云ふる者くゝ云ふん

日宮中乃
花
野
蛇乃
麥水

花乃うハ色ハ世乃人ハ知ら
越向と改しも泥中乃蓮乃ゝ

巻阿

山吉東人

梅の実や

梅の実を洗けり
澗水東ニ流テ復向西
かとり野かな

芳人

雪乃朝

積ても

何と

面白や

五色しよく原りて
居湖花高

中可
煙乃
山陰や

梅乃陰

蘭更

山雪ふり可枝
ちる
ちる
蝶乃
唱仕ふ

中古乃風貴と

汪由

盡ゝ形

桜乃

戻る

ゝ春ら八ゆ小

進退花小狐心しゝ
ゝ玉まるゆゝ
やさしく
ゝひるゝ

櫻八や

青乃

ゝ

ゝ

物八

既白

青ゝ
陸小
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

初鶏

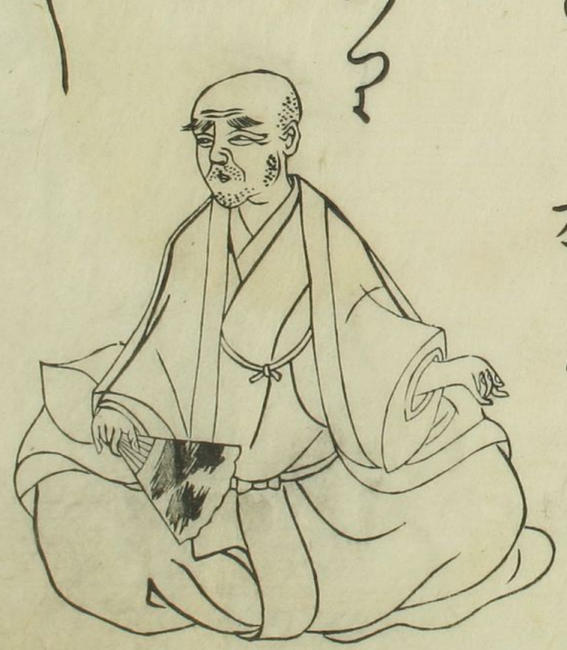
二ツ

四ツ

馬明

詩叩或静

梨乃花
咲てく
是
鳴
鶯の
康工



ゆ
ゆ
竹
七梅
栖居

盧元

大事ハ小事ヨリ起ル
小事ハ大事ヲ成ス
作リ分ケ一字乃教ヘ
ヲ熟シ見テ
ヲ考ヘラルヘシ

希因

死ハ生ル物ヲ
活ハ其ノ姿眼前ニ
ヲ見ルトコロ活ヲ見
志ノモ立枝葉乃字ヲ
優ニ学ブヲ
ヲ学ケル

麥林

その心乃さとみ
おくふかく少人も
多もさとし

天性不思議
神境とそらう

誹林百一集跋

清華山房藏書

余嘗善誹之言洽而不厭滑而
文亡立之之次蓋原出乎古國風
之變之末也尚矣継作有人而
挑青者興焉如大振日錬月
鎔愈出愈奇嘖々而頑也夫
性靈之発於天機者狂豪

篇之生歟呼嗚應變現无
窮以陶冶性情發泄渣滓豈
之无裨於世道乎哉今斯
篇也无名生一二生百而吹
萬不同亦可知乎康工氏因
心而謂深巧藁篇之功而濯
于冶之中者余未知誰之至

矣者但知其簡而文洁而不厭
之為可善焉而已是為序
語水什散人也

明和二乙酉年四月

京寺町通二條下町

橘屋治兵衛梓